

私は金沢市内にある真宗大谷派寺院で生まれ育ちました。9歳の時に得度してお坊さんになりました。とはいえ浄土真宗の僧侶は髪があり、身体的な修行もないので、見た目には僧侶だとはわからないかもしれません。お寺に生まれたことによる影響は大きいもので、若い頃から仏教のみならず宗教全般に興味がありました。高校生の頃には、宗教に関する新書本をよく読んでいました。また、父は図書館で働いていて学者さんとの交流があったことと、祖父の叔父に学者がいたこともあり、私を大学教員にさせたいと思っていました。その影響は大きかったと思います。

大学の進路についてはかなり早く決めていました。私は三男で跡継ぎではないので、自立しなければという漠然とした思いがあったのか、地元を離れること、そして父の影響でインド仏教学に興味をもっていたこと、どちらかという寒い地域の方が好きだということと東北大学を選びました。

高校の同級生が同じ文学部に進学しましたが、それ以外には仙台には知り合いませんでした。人見知りで、消極的で、人間関係にも自信がなく、そのくせ自尊心は高い。今思えば大きなチャレンジだったと思います。その後の様々な出会いも含めて、すべて何か大きな力によって動かされて、自分にとって苦手な課題に向き合い続けてきたように思います。仙台に来た頃の私には、今私

が取り組んでいる臨床宗教師研修のプログラムなんて、想像もしていませんでした。

本書の目的は、臨床宗教師*の活動を通してスピリチュアルケア*や宗教的ケア*について書き記すことですが、はじめに私自身の「生育歴」の一端を紹介します。スピリチュアルケアや宗教的ケアを提供する者にとっては、自分の生育歴を見つめることが大切です。私たちの人間関係、コミュニケーションの方法には、子どもの頃から経験した様々なことが影響しています。専門職としてスピリチュアルケアに関わるときには、相手の内面に触れることになるのですから、自分自身の内面にも触れておいてほしいと思います。

なお、生育歴はいいから本題に入りたい、という方は、飛ばしていただいて構いません。

あらかじめお断りしておきますが、書籍化する文章なので、ネガティブな情報は関係者に迷惑を及ぼすおそれがあるので削除してあります。しかし、実際の生育歴では、きれいな事だけでなく、嫌な面、思い返したくないできごとにも向き合っていただきたいと思えます。

*臨床宗教師…第1章31頁参照

*スピリチュアルケア…第3章57頁参照

*宗教的ケア…第4章97頁参照

中学卒業まで

生まれ育ったのは金沢市郊外の田舎のお寺（真宗大谷派*）で、祖父母と両親と男兄弟3人の7人暮らし。小学校2年までは叔母も同居していたので8人でした。お寺なので近所の人たちがしょっちゅう出入りしていました。

記憶しているなかで、大きな転機は保育所に通い始めたところだと思います。理由はよくわかりませんが、同級生にいじめられたことだけは記憶しています。自分なりに振り返ると、この経験はコミュニケーションが苦手であること、理由の1つなのだと思います。小学校低学年のときの記憶としては、兄の同級生から「かわいいがっつもらった」ことです。近所の先輩たちにはいい意味で遊んでもらったりしていました。小学校で突然出会ってしまった知らないお兄ちゃん・お姉ちゃんたちに「かわいいね」と言われて囲まれたときは、むしろ恐怖感が強かったことを憶えています。彼らにはそんな意図は全くなくても、体の大きな知らない人たちに囲まれると、当時の私はそのように感じてしまったのです。

親兄弟・親戚・近所の方々からは十分に愛情を注いでいたと思います。

*真宗大谷派…親鸞を開祖とする浄土真宗の宗派。本山は京都の東本願寺。

男3人兄弟の末っ子なので、私は要領よく立ち振る舞っていたようです。次兄によると、私は必ず強い方につくとのこと。兄2人がケンカしていたら、長兄の側につくということです。今は私にも2人の男の子がいますが、兄は弟とケンカもするけれども、かわいがってしてくれます。その様子をみると、2人の兄には感謝しなければと思います。

中学に入ると、柔道部に入りました。これは、学生時代に柔道をしていた父の影響です。体重は90キロほどありましたが、専門的に指導してくれるコーチは olmaz、ほぼ先輩たちからの指導と自己流なので、あまり上手くはなかったのですが、高校でも柔道が続けたので初段をとることはできました。

中学時代で一番印象に残っているのは、3年生のときの同級生です。当時私は生徒会長で、彼はいわゆる番長でした。不思議なことに私たちは、毎日のように数学担当の教頭先生の前で一緒に勉強する仲でした。ある先生から、彼やその仲間の情報を教えて欲しいと、いわばスパイのような役割を頼まれたのですが、その先生のやり方が気に入らず、スパイの役目は一切果たすことはありませんでした。逆に、彼らといる時間が心地よく感じられました。「お寺の子」だから品行方正でいなくてはならない私から見ると、彼ら「不良グループ」は自由でいいなあと思っていました。私ももう少し自分を解放していいんじゃないか、そうし

たいなあと思う大きなきっかけになりました。

2 高校から大学へ

自宅から高校までは12キロの距離がありました。バスと汽車を乗り継ぐと1時間半、自転車だと40分ぐらいかかりました。必ずしも時間に正確でなく、息苦しいバスよりも、1人で気ままな自転車を選びました。雨の日はカッパを着ればいいのですが、雪の日はさすがに自転車は危険です。当時の金沢は、道路でも10センチ以上の雪がつもり、何日も圧雪状態のままということがよくありました。そこで高校1年生の冬は、高校までバスで20分ぐらいのところにある、母の実家に下宿させてもらうことになりました。

母の実家も真宗大谷派のお寺です。小さい頃から従兄弟たちとも仲良く遊んでいたのですが、私は気安くお願いしたように思います。迎える側の叔父・叔母の気遣いにすっかり甘えていたと思います。春になって、荷物を引き上げて実家に帰る時に、私は変な気恥ずかしさがあった。「お世話になりました。ありがとうございます。叔父も叔母も啞然としていました。」という大切な言葉が言えませんでした。叔父も叔母も啞然としていた